

『徒然草』研究

——兼好の思想の由来——

土屋博映

要旨

『徒然草』の成立に関し、「04紀要」(跡見学園女子大学短期大学部紀要 第四十集)収載の拙稿、『徒然草』研究の序章、をさす)をふまえ、『徒然草』本文の再検討をおこなうことにより、以下のような結論を得た。作者は、三〇段を記した段階で、大きな不幸にみまわれ、しばらく筆をおいた。しかし彼は再び本書を書き始めた。その原動力は、彼が執筆を中断していた間に経験したことである。それは、漢籍を中心とする中国思想であり、とくに無為自然をとく老荘思想に多大な影響をうけたことによると考えられる。

一、はじめに

『跡見学園女子大学短期大学部紀要 第四十集』（平成一六年三月）に『徒然草』研究の序章」として、序段のあり方について、研究をした。その結論として、次のような内容が導かれた。以下、前記論文を引用する場合に、「04紀要」として引用する。

「さて、ここまでの序段といわれている部分は、ある程度の分量を書いたから清書する段階で付け加えたものだろうと考えられる。通説に従えば、三十段程度を書き記してから、それらの内容をふまえて、最初におかれたのであろう。

では第一段との関係はどうなるかというと、『いでや』というのは、それだけで完結した表現と考えてみるとうまくいく。（中略）『いいやいいや』とワンクッションをおき、本論に突入したと考えるのである。

僧侶が俗世間に『願はしかるべきこと』などを抱いてはいけない。それで『いでや』がおかれたのである。最初の段のほうに『ありたき』とか『あらまほしけれ』などという言葉が存在しているのは、まさにその流れである。そういつておきながら、兼好は僧侶を否定するかのとき論を展開する。兼好の言わんとしたことはそういったことなのである。それが結果として全篇をつらぬくように書きつがれて、最終的に二百四十三段（プラス序段）という大きなものとなっていったといえよう。」（04紀要）

「これは、序段についての位置づけをしたものであるが、大きな問題は、『三十段程度を書き記してから、それらの内容をふまえて、最初におかれたのであろう。』という部分である。つまり、序段が後から付け加えられたものであること、それが三十段程度を書き記してからであること、という二点が問題となる。」（04紀要）

「04紀要」の引用から、冒頭「三十段程度」は、初期の『徒然草』の状態を保存していると思われ、かつ、兼好の『徒然草』執筆動機が、ある程度直接的に残されたと考えられるのである。

本稿では、「04紀要」を踏まえ、適宜引用しつつ、「三十段程度」を、序段から第三十七段までと仮定し、それらの段の個性を考え、兼好がどのような影響下で、『徒然草』を執筆したのかを、「04紀要」の補足の立場に立ちつつ、再考してみようとするものである。

二、本文

ここでは、序段から第三十七段までを、段にとられないように段わけをしないで、連続した文章としてとらえてみた。なお、本文は『徒然草』（西尾実校注・岩波文庫）による。（以上「04紀要」と同じ）

文頭の番号は土屋がつけたが、段数と一致はしていない。キーワードと見られる表現をゴシック体で示した。

①つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほし

けれ（序段）

② いでや、この世に生まれては、願はしかるべき事こそ多かれ。

③ 御門の御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御有様はさらなり、ただ人も、舍人など給はるきははゆゆしと見ゆ。その子、孫までは、はふれにたれど、なほなまめかし。それより下つかたは、ほどにつけつつ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくちをし。（第一段）

④ いにしへのひじりの御代の政をも忘れ、民の愁へ、国のそこなはるるをも知らず、万にきよらをつくしていみじと思ひ、所せきさましたる人こそ、うたて、思ふところなく見ゆれ。

「衣冠より馬・車にいたるまで、あるにしたがひて用ゐよ。美麗をもとむる事なかれ」とぞ、九条殿の遺誠にも侍る。順徳院の禁中の事どももかかせ給へるにも、「おはやけの奉り物は、おろそかなるをもてよしとす」とこそ侍れ。（第二段）

⑤ 万にいみじくとも、色このまざらん男は、いとさうざうしく、玉の盃の底なきこちぞすべき。

露霜にしはたれて、所さだめずまどひありき、親のいさめ、世の誇りをつつむに心のいとまなく、あふさきるさに思ひみだれ、さるは独寝がちにまどろむ夜なきこそをかしけれ。

⑥ 法師ばかり羨ましからぬものはあらじ。「人には木の端のやうに思はるるよ」と清少納言が書けるも、げにさることぞかし。いきほひまうに、ののしりたるにつけて、いみじとは見えす。増賀ひじりのいひけんやう

に、名聞ぐるしく、仏の御をしへに違ふらんとぞおぼゆる。ひたふるの世すて人は、なかなかあらまほしきかたもありなん。

人は、かたちありさまのすぐれたらんこそ、あらまほしかるべけれ。物うちいひたる、聞きにくからず、愛敬ありて、言葉おほからぬこそ、飽かず向かはまほしけれ。めでたしと見る人の、こころ劣りせらるる本性みえんこそ口をしかるべけれ。

⑦ しな・かたちこそ生れつきため、心はなどか、賢きより賢きにも移さば移らざらん。かたち・心ざまよき人も、才なく成りぬれば、しなぐだり、顔にくさげなる人にも立ちまじりて、かけずけおさるるこそ、本意なきわざなれ。

⑧ ありたき事は、まことしき文の道、作文、和歌、管弦の道、また有職に公事の方、人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。手など拙からず走りかき、声をかしくて拍子とり、いたまじうするものから、下戸ならぬこそをのこはよけれ。

さりとして、ひたすらたはれたる方にはあらで、女にたやすからず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ。（第三段）

⑨ 後の世の事、心に忘れず、仏の道うとからぬ、心にくし（第四段）

⑩ 不幸に愁へに沈める人の、頭おろしなど、ふつつかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つこともなく明し暮したる、さるかたにあらまほし。

⑪ 頭基中納言のいひけん、配所の月、罪なくて見ん事、さも覚えぬべし。（第五段）

⑫わが身のやんごとなからんにも、まして数ならざらんにも、子といふものなくてありなん。

前中書王・九条太政大臣・花園左大臣、みな族絶えん事を願ひ給へり。染殿大臣にも、「子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれ給へるはわるき事なり」とぞ、世継の翁の物語にはいへる。聖徳太子の、御墓をかねて築かせ給ひける時も、「ここをきれ、かしこを断て。子孫あらせじと思ふなり」と侍りけるとかや。(第六段)

⑬あだし野の露きゆる時なく、鳥辺山の煙立ちさらでのみ住みはつる習ひならば、いかに、もののあはれもなからん。世はさだめなきこそ、いみじけれ。

命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふの夕を待ち、夏の蟬の春秋をしらぬもあるぞかし。つくづくと一年をくらすほどだにも、こよなうのどけしや。飽かず、惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢の心ちこそせめ。住み果てぬ世に、みにくき姿を待ちえて何かはせん。命長ければ恥多し。長くとも、四十にたらぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。

そのほど過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人に出でまじらはん事を思ひ、夕の陽に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世をむさぼる心のみふかく、もののあはれも知らずなりゆくなん、浅ましき。(第七段)

⑭世の人の心まどはす事、色欲にはしかず。人の心は愚かなるものかな。

匂ひなどは假のものなるに、しばらく衣装に薰物すと知りながら、えならぬ匂ひには、必ず心ときめきするものなり。久米の仙人の、物あらふ女の脛の白きを見て、通を失ひけんは、誠に、手足・はだへなどのきよらに肥えあぶらづきたらんは、外の色ならねば、さもあらんかし。(第八段)

⑮女は髪をめたからんこそ、人の目たつべかめれ。人のほど、心ばへなどは、もの言ひたるけはひにこそ、物越しにも知らるれ。

ことにふれて、うちあるさまにも人の心をまどはし、すべて女の、うちとけたる寝も寝ず、身を惜しとも思ひたらず、堪ふべくもあらぬわざにもよく堪へしのぶは、ただ色を思ふがゆゑなり。

まことに、愛着の道、その根ふかく、源とほし。六塵の樂欲おほしといへども、皆厭離しつべし。その中に、ただ、かの惑ひのひとつ止めがたきのみぞ、老いたるも若きも、智あるも愚かなるも、かはる所なしとみゆる。されば、女の髪すちをよれる綱には大象もよくつながれ、女のはける足駄にて作れる笛には、秋の鹿、必ず寄るとぞ言ひつたへ侍る。みづからいましめて、恐るべく慎むべきは、この惑ひなり。(第九段)

⑯家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、仮の宿りとは思へど、興あるものなれ。

よき人の、のどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、一きはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしききららかならねど、木だちものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度も昔覚えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

おほくの工の心をつくしてみがきたて、唐の、大和の、めづらしく、えならぬ調度どもならべおき、前栽の草木まで心のままならず作りなせるは、見る目もくるしく、いとわびし。さてもやは、ながらへ住むべき。また、時の間の煙ともなりなんとぞ、うち見るより思はるる。大方は、家居にこそ、ことざまおしはからるれ。

⑰後徳大寺大臣の寢殿に、鳶ゐさせじとて縄をはられたりけるを、西行が見て、「鳶のゐたらんは、何かは苦しかるべき。この殿の御心、さばかりにこそ」とて、そのちは参らざりけると聞き侍るに、綾小路宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや縄をひかれたりしかば、かの例思ひ出られ侍りしに、誠や、「烏の群れゐて池の蛙をとりければ、御覧じかなしませ給ひてなん」と人の語りしこそ、さてはいみじくこそと覚えしか。

徳大寺にもいかなる故か侍りけん。(第一〇段)

⑱神無月の比、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入る事侍りしに、遥かなる苔の細道をふみわけて、心細くすみなしたる庵あり。木の葉に埋もるる懸樋の雫ならでは、露おとなふものなし。閑伽棚に菊・紅葉など折り散らしたる、さすがにすむ人のあればなるべし。

かくてもあられるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覚えしか(第一段)

⑲同じ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなき事も、うらなくいひ慰まんこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、露違はざらんと向ひゐたらんは、ただひとりあるここちやせ

ん。

互に言はんほどの事をば、「げに」と聞かひあるものから、いささか違ふ所もあらん人こそ、「我はさやは思ふ」など争ひ憎み、「さるから、さぞ」ともうち語らば、つれづれ慰まめと思へど、げには、少しかつかたも、我と等しからざらん人は、大方のよしなしごと言はんほどこそあらめ、まめやかかの心の友には、はるかにへだたる所のありぬべきで、わびしきや。(第二二段)

⑳ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむわざなる。文は、文選のあはれる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。この国の博士どもの書ける物も、いにしへのは、あはれる事多かり。(第三三段)

㉑和歌こそなほをかしきものなれ。あやし山のしがつのしわざも、いひ出でつればおもしろく、おそろしき猪のししも、「ふす猪の床」といへば、やさしくなりぬ。

この比の歌は、一ふしをかしく言ひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、ことばの外に、あはれに、けしき覚ゆるはなし。貫之が「糸による物ならなく」といへるは、古今集の中の歌屑とかや言ひ伝へたれど、今の世の人の詠みぬべきことがらとは見えず。その世の歌には、すがた・言葉、このたぐひのみ多し。この歌に限りてかくいひたてられたるも知りがたし。源氏物語には、「物とはなしに」とぞ書ける。新古今には、「のこる松さへ峰にきびしき」といへる歌をぞいふなるは、まことに、少しくだけたるすがたにもや見ゆらん。さ

れどこの歌も、衆議判の時、よろしきよし沙汰ありて、後にも殊更に感じ、仰せ下されける由、**家長が日記**には書けり。

歌の道のみ、いにしへに変らぬなどいふ事もあれど、いさや。今も詠みあへる同じ詞・歌枕も、昔の人の詠めるは、さらに同じものにあらず。やすくすなほにして、姿もきよげに、あはれも深くみゆ。

梁塵秘抄のえい曲の言葉こそ、また、あはれなる事は多かれ。昔の人は、ただいかに言ひすてたることくさも、皆いみじく聞ゆるにや（第一四段）

②② いづくにもあれ、しばし旅たちたるこそ、めさむる心ちすれ。

そのわたり、ここかしこ見ありき、みなかびたる所、山里などは、いと目なれぬ事のみぞ多かる。都へたよりもとめて文やる。「その事かの事、便宜に忘るな」などいひやるこそをかしけれ。

さやうの所にてこそ、万に心づかひせらるれ。持てる調度まで、よきはよく、能ある人、かたちよき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。

②③ 寺・社などに、しのびてこもりたるをかし。（第一五段）

②④ 神楽こそ、なまめかしく、おもしろけれ。

おほかた、ものの音には、**笛・箏・篳篥**。常に聞きたきは、**琵琶・和琴**。

（第一六段）

②⑤ 山寺にかきこもりて、仏に仕うまつるこそ、つれづれもなく、心の濁りも清まる心地すれ。（第一七段）

②⑥ 人は己をつづまやかにし、奢りを退けて、財をもたず、世をむさばらざらんぞ、いみじかるべき。昔より、賢き人の富めるは稀なり。

唐土に許由といひつる人は、さらに身にしがへる貯へもなくて、水をも手して捧げて飲みけるを見て、なりひさこといふ物を人の得させたければ、ある時、木の枝にかけたりけるが、風にふかれて鳴りけるを、かしかましとて捨てつ。また手に掬びてぞ水も飲みける。いかばかり心のうち涼しかりけん。孫震は冬月に衾なくて、藁一束ありけるを、夕にはこれにふし、朝にはをさめけり。

唐土の人は、これをいみじと思へばこそ、記しとどめて世にも伝へけめ、これらの人は、語りも伝ふべからず。（第一八段）

②⑦ 折節の移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ。

「もののあはれは秋こそまされ」と、人ごとに言ふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮きたつものは、春の気色にこそあめれ。鳥の声などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草もえいづるころより、やや春ふかく霞みわたりて、花もやうやうけしきだつほどこそあれ、折しも雨風うちつづきて、心あわたたしく散り過ぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにただ心をのみぞ悩ます。花橘は名にこそおへれ、なほ、梅の匂ひにぞ、いにしへの事も立ちかへり恋しう思ひいでらる。山吹の清げに、藤のおほかなきさましたる、すべて、思ひすてがたきこと多し。

「灌佛の比、祭の比、若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の恋しさもまされ」と、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめふく比、早苗とるころ、水鶏のたたくなど、心ぼそからぬかは。六月の比、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあ

はれなり。六月祓またをかし。

七夕まつるこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁なきてくるころ、萩の下葉色づくほど、早稲田刈り干すなど、とりあつめたる事は秋のみぞ多かる。また、野分の朝こそをかしけれ。言ひつづくれば、みな源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じ事、また、今さらに言はじともあらず。おほしき事言はぬは腹ふくるるわざなれば、筆にまかせつつ、あぢきなきすさびにて、かつ破りすつべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯れのけしきこそ、秋にはをさをさおとるまじけれ。汀の草に紅葉の散りとどまりて、霜いと白うおける朝、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人ごとに急ぎあへる比ぞ、またなくあはれる。すさまじきものにして見る人もなき月の寒けく澄める、廿日あまりの空こそ、心ほそきものなれ。御佛名・荷前の使立つなどぞ、真にやんごとなき。公事ども繁く、春の急ぎにとり重ねて催し行はるるさまぞ、いみじきや。追灘より四方拝につづくこそ、面白けれ。晦日の夜、いたう暗きに、松どもともして、夜半すぐるまで、人の門たたき走りありきて、何事にかあらん、ことごとくのしりて、足を空にまどふが、暁がたより、さすがに音なく成りぬるこそ、年の名残も心ほそけれ。亡き人のくる夜とて魂まつるわざは、この比都にはなきを、東のかたには、なほする事にてありしこそ、あはれなりしか。

かくて明けゆく空の気色、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれし

げなるこそ、またあはれなれ。(第一九段)

②⑧なにがしとかやいひし世捨人の、「この世のほだし持たらぬ身に、ただ空の名残のみぞ惜しき」と言ひしこそ、誠にさも覚えぬべけれ。(第二〇段)

②⑨万のことは、月見るにこそ慰むものなれ。ある人の、「月ばかり面白きものはあらじ」と言ひしに、またひとり、「露こそなほあはれなれ」とあらそひしこそ、をかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらん。

月・花はさらなり、風のみこそ、人に心はつくめれ。岩にくだけて清く流るる水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。「元・湘日夜東に流れ去る。愁人の為にとどまること少時もせず」といへる詩を見侍りしこそ、哀なりしか。嵇康も、「山沢にあそびて、魚鳥を見れば心たのしふ」といへり。人とほく、水清き所にさまよひありきたるばかり、心なくさむ事はあらじ。(第二段)

③⑩何事も、古き世のみぞしたはしき。今様は、無下にいやしくこそ成りゆくめれ。かの木の道の匠の造れる、うつくしきうつは物も、古代の姿こそをかしと見ゆれ。

文の詞などぞ、昔の反故どもはいみじき。ただいふ言葉も、口をしようこそなりもてゆくなれ。いにしへは、「車もたげよ」、「火かかげよ」とこそいひしを、今様の人は、「もてあげよ」、「かきあげよ」といふ。「主殿寮人数だて」と言ふべきを、「たちあかししろくせよ」と言ひ、最勝講の御聴聞所なるをば、「御講の蘆」とこそ言ふを、「かうろ」と言ふ、くちをしとぞ、古き人はおほせられし。(第二二段)

③① 衰へたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有様こそ、世づかず、めでたきものなれ。

露台・朝がれひ・何殿・何門などは、いみじとも聞ゆべし。あやしの所にもありぬべき小薔・小板敷・高遣戸なども、めでたくこそ聞ゆれ。「陣に夜の設せよ」といふこそいみじけれ。夜御殿のをば、「かいともしとうよ」などいふ、まためでたし。上卿の、陣にて事おこなへるさまは更なり、諸司の下人どもの、したり顔に、なれたるものをかし。さばかり寒き夜もすがら、ここかしこに睡り居たるこそをかしけれ。「内侍所の御鈴のおとは、めでたく優なるものなり」とぞ、徳大寺太政大臣はおほせられける。(第二三段)

③② 齊王の、野宮におはしますありさまこそ、やさしく、面白き事の過ぎりと覚えしか。「経」・「仏」など忌みて、「なかご」、「染紙」などいふなるものをかし。

すべて神の社こそ、すてがたく、なまめかしきものなれや。ものふりたる森のけしきもただならぬに、玉垣しわたして、榊木に木綿かけたるなど、いみじからぬかは。ことにをかしきは、伊勢・賀茂・春日・平野・住吉・三輪・貴布祢・吉田・大原野・松尾・梅宮。(第二四段)

③③ 飛鳥川の淵瀬ならぬ世にしあれば、時うつり、事さり、楽しび・悲しびゆきかひて、花やかなりしあたりも人すまぬ野らとなり、変らぬ住家は人あらたまりぬ。桃李ものいはねば、誰とともにか昔を語らん。まして、見ぬいにしへのやん事なかりけん跡のみぞ、いとほかなき。

京極殿・法成寺など見るこそ、志とどまり事変じにけるさまは、あは

れなれ。御堂の作りみがかせ給ひて、庄園多く寄せられ、我が御族のみ、御門の御うしろみ、世のかためにて、行末までとおほしおきし時、いかならん世にも、かばかりあせはてんとはおぼしてんや。大門・金堂など近くまでありしかど、正和の比、南門は焼けぬ。金堂はそののち倒れふしたるままにて、とりたつるわざもなし。無量寿院ばかりぞ、そのかたとて残したる。丈六の仏九体、いと尊くてならびおはします。行成大納言の額書ける扉、なほあざやかに見ゆるぞあはれる。法華堂なども、いまだ侍るめり。これもまた、いつまでかあらん。かばかりの名残だになき所々は、おのづからあやしき礎ばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。

されば、万に見ざらん世までを思ひ掟てんこそ、はかなかるべけれ。

(第二五段)

③④ 風も吹きあへずうつろふ人の心の花に、なれにし年月を思へば、あはれと聞きしことの葉ごとに忘れぬものから、我が世の外になりゆくならひこそ、亡き人のわかれよりもまさりてかなしきものなれ。

されば、白き糸の染まん事を悲しび、路のちまたのわかれん事をなげく人もありけんかし。堀川院の百首の歌の中に、

むかし身し妹が垣根は荒れにけり

つばなまじりの葦のみして

さびしきけしき、さる事侍りけん。(第二六段)

③⑤ 御国ゆづりの節会おこなはれて、剣・璽・内侍所わたし奉らるるほどこそ、限なう心ぼそけれ。

新院のおりゐさせ給ひての春、詠ませ給ひけるとかや、

殿守のとものみやつこよそにして

はらはぬ庭に花ぞ散りしく。

今の世のこと繁きにまぎれて、院にはまゐる人もなきぞさびしげなる。

かかる折にぞ、人の心もあらはれぬべき。(第二七段)

③⑥諒闇の年ばかりあはれなる事はあらじ。

倚廬の御所のさまなど、板敷をさげ、葦の御簾をかけて、布の帽額あらあらしく、御調度どもおろそかに、皆人の装束、太刀・平緒まで、こ
とやうなるぞゆゆしき。(第二八段)

③⑦しづかに思へば、よろづに過ぎにしかたの恋しさのみぞせんかたなき。
人静まりて後、長き夜のすさびに、なにとなき具足とりしたため、残

しおかじと思ふ反古など破りすすつる中に、亡き人の手ならひ、絵かきす
さびたる見出でたるこそ、ただその折の心地すれ。この比ある人の文だ
に、久しく成りて、いかなる折、いつの年なりけんと思ふは、あはれな
るぞかし。手なれし具足なども、心もなくて変らず久しき、いと悲し。

(第二九段)

③⑧人のなきあそばかり悲しきはなし。

中陰のほど、山里などにうつろひて、便あしく狭き所にあまたあひゐ
て、後のわざども営みあへる、心あわたし。日かずのはやく過ぐるほ
どぞ、ものにも似ぬ。はての日は、いと情けなう、たがひに言ふ事もな
く、我かしここげに物ひきしたため、ちりぢりに行きあかれぬ。もとの

すみかに帰りてぞ、更に悲しき事は多かるべき。「しかしかのことは、あ
なかしこ、跡のため忌むなる事ぞ」など言へるこそ、かばかりのなかに
何かはと、人の心はなほうたておぼゆれ。

年月経ても、露忘るるにはあらねど、去る者は日々に疎しといへるこ
となれば、さはいへど、そのきはばかりは覚えぬにや、よしなしごと言
ひてうちも笑ひぬ。からはけうとき山の中のをさめて、さるべき日ばか
り詣でつつ見れば、ほどなく卒塔婆も苔むし、木の葉ふり埋みて、夕の
嵐、夜の月のみぞ、こととふすがなりける。

思ひ出でてしのぶ人あらんほどこそあらめ、そもまたほどなくうせて、
聞きつたふるばかりの末々は、哀とやは思ふ。さるは、跡とふわざも絶
えぬれば、いづれの人と名をだに知らず。年々の春の草のみぞ、心あら
ん人はあはれと見るべきを、はては、嵐にむせびし松も千年をまたで薪
にくだかれ、古き墳はすかれて田となりぬ。その形だになくなりぬるぞ
悲しき。(第三〇段)

③⑨雪のおもしろう降りたりし朝、人のがり言ふべき事ありて文をやる
とて、雪のこと何ともいはざりし返事に、「この雪いかを見ると、一筆の
たまはせぬほどの、ひがひがしからん人のおほせらるる事、聞きいるべ
きかは。返す返す口をしき御心なり」と言ひたりしこそ、をかしかりし
か。

今は亡き人なれば、かばかりの事も忘れがたし。(第三一段)

④⑩九月廿日の比、ある人にさそはれたてまつりて、明るるまで月見あ
りく事侍りしに、おぼしいづる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒

れたる庭の露しげきに、わざとならぬ匂ひ、しめやかにうち薫りて、しのびたるけはひ、いともあはれなり。

よきほどにて出で給ひぬれど、なほ事さまの優におぼえて、物のかくれよりしばし見あたるに、妻戸を今すこしおしあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、くちをしからまし。跡まで見る人ありとは、いかでか知らん。かやうの事は、ただ朝夕の心づかひによるべし。その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。(第三二段)

④①今の内裏作り出されて、有職の人々に見せられるに、いづくも難なしとて、すでに遷幸の日ちかく成りけるに、玄輝門院の御覧じて、「閑院殿の櫛形の穴は、まろく、縁もなくぞありし」と仰せられける、いみじかりけり。

これは葉の入りにて、木にて縁をしたりければ、あやまりにて、なほされにけり。(第三三段)

④②甲香は、ほら貝のやうなるが、ちひさくて、口のほどの、細長にさし出でたる貝のふたなり。武蔵野国金沢といふ浦にありしを、所の者は「へなたりと申し侍る」とぞ言ひし。(第三四段)

④③手のわろき人の、はばかり文書きちらすは、よし。みぐるしとて、人に書かするは、うるさし。(第三五段)

④④「久しくおとづれぬ比、いかばかり恨むらんと、我が怠り思ひ知られて、言葉なき心地するに、女の方より、『仕丁やある、ひとり』など言ひおこせたるこそ、ありがたくうれしけれ。さる心ざましたる人ぞよき」と、人の申し侍りし、さもあるべき事なり。(第三六段)

④⑤朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時、我に心おき、ひきつくるへるさまに見ゆるこそ、「今更かくやは」など言ふ人もありぬべけれど、なほげにげにしく、よき人かなとぞ覚ゆる。

④⑥疎き人の、うちとけたる事など言ひたる、また、よしと思ひつきぬべし。(第三七段)

三 問題点の検討

まず、本稿に関連する内容を「04紀要」から引用する。

「1、つれづれなる(序段)

『徒然草』の題名の由来となったことばであるが、実はこの語は本書全体で8例しかない。そのうち3例までが二〇段までに存在する。

2、よしなし事(序段)

この語は、3例のみ。いずれも三〇段までに存在する。ただし「よしなし」という形容詞は、九八段に1例だけある。

3、ものぐるほしけれ(序段)

冒頭を代表する、様々な問題を含む語であるが、実は本書にはここですく使われていない。ただし「ものぐるひ」が一一二段にある。

4、序段

序段については、既述のごとく、紀要四〇集で結論付けたが、ここで確認できることは、「つれづれ」という気持ちで、序段以下を書き始めていったろうことは、少ない「つれづれ」の用例の半分近くが三〇段以内

で使われているということから、言えそうである。また「よしなしごと」もすべて三〇段以内で使われている。ただし、「ものぐるほし」といった個性的であろうと思われる語が、この序段にしかないという事実をどのように考えるかは問題である。

いでや、この世に生まれては、願はしかるべき事こそ多かれ。(第一
段)

この一文が、実際に本書が書かれた最初のものであろうと推定される。キーワードは「願はしかる」である。この世（現世・俗世間）にいったん生まれると、欲望が多い、ということ、そんなことを僧侶の身である兼好が言うことに、ためらいが生まれ、それを打ち消して思い切って書き始めるという姿勢を示すのが「いでや」という感動詞だと考えた。

その願いが次々と記されるのが初めの方に位置する段であると言うことができる。

④④、いづくにもあれ、しばし旅たちたるこそ、めさむる心ちすれ(第一
五段)

これは第一五段の冒頭の一文であるが、実は、この部分、今までもっとも前段の流れ、また「いでや」という方向性を受けていない。どうも第一四段までが一気にかなり近い間に書かれたもののように思われる。

④⑤、第一五段

④④でそのように述べたが、まったく無関係とも言い切れない。それは「ゐなかびたる所、山里などは」のあたりが第一一段と重なる点もないことではないからである。しかし無関係とは言い切れないものの、関

係ありとも言えないのは確かであり、ここらへんが一つの、執筆上の境界目ということができるかもしれない。ところで本段の最後の一文「寺・社などに、しのびてこもりたるをかし。」は本段に含んでよいものだろうか、というほどに、『枕草子』風に連想的である。「こもりたるも」の「も」があるから、ここに含んでおいてよいのだろうけれど、兼好らしくないと言え、兼好らしくない。

④⑥、神楽こそ、なまめかし、おもしろけれ(第一六段)

ここで「なまめかし」という語に注意しておきたい。「なまめかし」は本書全体で5例、うち4例が三〇段以内に用いられているので、兼好が執筆当初好んだ言葉の一つだということがわかる。

④⑦、第一六段

本段の「神楽」は前段の「寺・社」の「社」からの連想なのだろうか。とにかく④⑤の「いづくにか」から始まる第一五段、さらに続く本段、そして第一七段、の続き具合は、著しく連想的ということから、兼好らしくない。繰り返しになるが、ここらへんが執筆上の節目というように思われてならない。大体「ものの音には、笛・箏・琴。常に聞きたきは、琵琶・和琴。」などという表現は、『枕草子』の類集段にははなだしく類似している。意識して『枕草子』の模倣をしているようだ。

④⑤⑥、第一八段

本段は、本書の記述の基本姿勢を示すものと言ってよい。つまり、冒頭の「人は」以下で、主題と言ったものを提示し、「唐土に」以下で具体例を示し、さらに最後の「唐土の人は」以下で結論を述べるといったも

のである。また「これらの人は語りも伝ふべからず。」などという、結論部分をぼかした表現にするのも本書での彼らしさ、と言える。要するに本段あたりで、彼の本書への姿勢がかなり固まってきたと言ふことなのであろう。

⑤2、第十九段

本段は⑤1に述べたように前との関連がない。ここも執筆の境目であるのかもしれない。「言ひつづければ、みな源氏物語・枕草子などにことぶりにたれど」と、先行の作品を意識している点や、「冬枯れのけしきこそ、秋にはをさをさおとるまじけれ」などと記している点から、平安時代の作品や、発想をかなり意識し、それと対抗して自己の特徴を表そうとしている、つまり随筆である本書のあり方、方向性を、ここらへんで意識的に考え始めたということが出来そうである。

⑤6、何事も古き世のみぞしたはしき (第二二段)

ここで、このようにまとめたことは、兼好の、「古き世」への憧れを決定付けたものとして、重要であろう。こう一言でまとめることにより、今まで焦点の定まらなかった彼の憧れの方向が明確になったのである。

⑥0、飛鳥川の淵瀬ならぬ世にしあれば、時うつり、事さり、樂しび、悲しびゆきかひて、花やかなりしあたりも人すまぬ野らとなり、変わらぬ住家は人あらたまりぬ (第二五段)

この部分、川の流れを引用して、世の中を嘆く点は、『方丈記』と類似している。また「はかなし」という語を二回、「あはれ」という語を二回、用いている点、今までの兼好とは異なり、世をはかなむ気持ちが前

面に出ている。

⑦1、第三〇段

主観的な考えだが、本段の構成は見事である。主題をもとに時間の経過にしたがって、死者が次第に忘れさられて行く様子が描かれている。

「かなし」という語は、本書全体で6例のみだが、そのうち6例が三〇段よりも前、しかも3例が本段に用いられている。第二五段から始まった、むなしさを示す内容がここまでつながっている。

⑦2、第三一段

本段は、「亡き人」の思い出が描かれている。そういう点から言えば、第二九段に直結し、第三〇段とも重なるのだが、それを「をかし」で言い切っているところが大きな相違である。学説一般では、第三〇段までが、感傷的だというが、まさにそのとおりである。主観的で、自己の感情がちらちら垣間見えていたのが、第三一段以降、客観的に対象を見据えようという姿勢に変わっていく。

⑦3、第三二段

本段も、最後に「その人、ほどなく失せにけり」とあるのにも関わらず、生前の本人の優雅さを中心に述べていて、いささかも感傷にひたつてなどいない。

⑦4、第三三段以降

第三三段以降も第三二段の傾向を受けている。少なくとも、今回の検討の範囲の第三七段まではそうである。」

以上、「04紀要」の抜粋である。また、次に同論文から引用する。

「本稿での検討は、今までの学説を追従しただけに終始したかもしれないが、各段に用いられた、心情的な語を中心に、著者兼好の意識の流れを追った点に特徴がある。

その結果次のようにまとめることができる。

1、第一段の『願はし』の流れは、第一五段まで続いている。ただし第一〇段から少しずつ、その流れが変化し、第一四段で、『願はし』の流れは途絶える。

2、第一五段からは『旅立ち』からの単なる連想の流れで、これが第一八段まで続く。ここには、1のような根底を『願はし』で貫くようなものはない。

3、第一九段は『折節の移りかはる』ことについて述べた。本段では『源氏物語』や『枕草子』への意識が見られた。本書を、そういった古典となぞらえるという意識のあらわれであろう。そこから第二四段までは、やはり根底を貫く思想的なものは感じられず、連想の発展で記述されているようだ。とくに第二四段などは『枕草子』の類集段を模倣しているようなところもあって、兼好自身の姿勢の不安定さを感じさせる。

4、第二五段から第三〇段までは、マイナスの言葉が多用され、彼自身、もつとも精神的に落ち込んでいるようにうかがえる。語で言えば『かなし』の多用である。しかし第三〇段で人間のはかなさから、千年の寿命といわれる松でさえ、薪となり、お墓すらなくなる、ということを書き

すことによって、人生を客観的に見る姿勢ができたのだろう。

5、第三一段からは、感傷にひたっていない、ということから、ここから随筆家、兼好の本当の旅立ちが始まったと考えてよいと思われる。

以上が記述の推定である。

ところで、序段はどうやって記されたか、という問題であるが、『ものぐるほし』という語が、唯一この序段にしかないということは、やはり、序段が読者への謙遜をこめた挨拶として独立して書かれた、つまり後から付け加えられた、と考えるのが素直であろう

ではいったいどの時点かというのがむずかしいが、それは第三〇段までの中の執筆の境目のどれかがそれにあたると考えられる。

『あやしうこそものぐるほしけれ』と、自分を見つめて、ある開き直りの境地を表しているとみれば、やはり従来の学説通り、第三〇段を書いた時点で、いったん筆を置き、しばらくの時間を隔てた上で、人生を客観的に見つめられるようになって、第三一段を記す前におかれたものとするのが妥当であろう。」「04紀要・四 終わりに」から

四 本文の再検討

本稿においても、以上のような「04年紀要論文」での結論に対し、基本的に変わるところはない。前記論文を受け、三〇段までが、『徒然草』成立上、最初期のものであると仮定した場合、『徒然草』を創作する動機がもつとも含まれているであろうことは想像に難くない。そこで、『徒然草』という作品を創作するに至った由来について、最初期部分を再検討

することによって考えてみたい。

三〇段までは、基本的には「04紀要」と同じ考えであるが、多少補足を加えると、三〇段までは、『枕草子』の影響をもっとも強く受けているものと考えておく。言い方を代えれば、『枕草子』の形に触発されたということである。雑纂形態であること、類集段（「は型」「もの型」）の影響が形の上で見られること、明確に「枕草子」「清少納言」と本文に記していることなどからそれは確かであろう。『徒然草』は、『枕草子』から、表現形態と、発想の自由さを学んだ。その上で、彼独自の随筆文学に進んでいくことになる。もちろん、内面的な思想においては、まったく異なるのだが。

まず最初に重要な文は、②「いでや、この世に生まれては、願はしかるべき事こそ多かれ」であり、「願はしかる」がキーワードとなっている。人間の願望、ひいては欲望、から本書が始められていることは、実に興味深い。

次に重要なものは、⑬「あだし野の」から始まる第七段である。いわゆる随筆らしき主張が、初めて見られる。それが、「世はさだめなきこそ、いみじけれ。」の一文である。ただし、この主張の位置は段の冒頭でも文末でもなく、やや位置的にバランスがとれていない。そういう点で、まだ彼の随筆を記述する文体も確立されていないと考えられる。

次に、⑭⑮と色欲にかなり強くふれているのも興味深い。兼好が、色欲への迷いを断ち切ろうとしているかのようにも見られる。精神的にもまだ俗世間から独立していないかのようなのである。

次に、⑳の「ひとり灯火の……文（ふみ）は」は『枕草子』の「書（ふみ）は」と関連深いのが、とくに『枕草子』にはない「老子のことば」と「老子」が登場するところには注目したい。

㉑「和歌こそ」（一四段）は、㉒と関連して記されたものと考えられる。㉒は、「いにしへのは、あはれなる事多かり。」がまとめだが、㉑も最後のほうに「あはれも深くみゆ。」と「あはれなる事は多かれ。」と類似しているのがその根拠である。また㉒を㉑よりも先に記しているところが、漢詩漢文に重きをおいている兼好の姿勢がうかがえよう。

この中国寄りの姿勢は、㉓にも見られる。昔をしのぶ尚古趣味の兼好はどうやら、「昔の中国」を「昔の日本」よりも上位に置いていたようだ。

ところで、雰囲気が一変するのが、㉔「飛鳥川」（二五段）である。この段は前半が「はかなき」、後半が「あはれなる」というキーワードでまとめられている。「無常」を強く意識している段である。兼好の身边に何かあったのではないかという推測を試みたくなるような、「無常」という嘆きに満ちあふれている。

続く㉕「風も吹きあへず」（二六段）も同様。「かなしき」「悲しび」「なげく」「さびしき」と悲しみのオンパレードである。㉖「御国ゆづり」（二七段）も、同様に「心ほそけれ」「さびしげなる」と存在する。㉗「諒闇の年」（二八段）も「あはれなる」とある。㉘「しづかに思へば」（二九段）も「せんかたなき」「悲し」と続き、そこで問題の三〇段（㉙）「人のなきあとはかり悲しきはなし」が登場する。

この三〇段は「悲しき」に始まり、法事の話から、さらに『文選』の「去る者は日々に疎し」を引用し、時間の経過、時の流れにそい、人の世のはかなさを述べ、最後に「その形だになくなりぬるぞ悲しき。」で終わるという構成になっている。

『徒然草』では、兼好はあまり自分のことは語らない。そういう姿勢をかたくなに守っているかのように感じられる。『方丈記』などと比べると、それは明らかである。序段から二九段までもそれは同様であった。しかるに、三〇段は少々異なる。確かに具体的な人名も月日も記されていないから、随筆（エッセイ）には属するのだろうか、とくに最初の段落の「中陰」についての記述は、自己の体験、それも記述した時期に非常に近い頃の体験だったという匂いが強く感じられる。中でも「しかしかのことは、あなかしこ、あとのため忌むなる事ぞ」という会話部分は、実際に見聞したことに違いないと確信できる。そこから次の段落の「去る者は日々に疎し」へとつながっていく。

自己の経験から一般論へ、そして人生のはかなさを述べて三〇段は完了するわけだが、そこには何等、人生観などは述べられていないのだ。いわゆる、結論が存在しない。人生への絶望感すら感じられる。

五 結論

ここで、仮に兼好が二五段あたりから公私につけて周辺で様々な「無常」に出会ったとしたと考えたらどうだろうか。当時の世の中の有様を鑑みれば、十分にそれはありそうなことである。そして三〇段を記した

直前に、まさにだめをおすように、身内の不幸に出会ったと仮定するのは許されないだろうか。それも一番信頼していた身内だとしたら、そのショックははかりしれないものがあつただろう。また、その法事に際し、心無い親戚の言動を受けたとしたら、その悲しみは何倍にもなったことだろう。私は、三〇段を仮にそう位置づけてみたいのである。そして、彼は、しばらく、筆を置いたと、いや置かざるをえない心の状態に陥ったと、推定する。

しかし、彼は、再び筆を取り上げる。それが③⑨「雪のおもしろう降りたりし朝」（三二段）と④⑩「九月廿日の比」（三二段）である。この二段は、今は「亡き人」の心に残る言動を上げているところが共通している。兼好の心情は、人は死んでも、その言動は自分の中に生きている、ということへの確認であつたのではないか。それは、三〇段までの、たとえば『文選』による「去る者は日々に疎し」という、ある意味で、故人に對し否定的な、人生に消極的な、そういった姿勢が、人生を肯定する姿勢へと転換したことを意味しているのである。

では、一体そういう姿勢はどこに由来するのか。三〇段はまさに人生に絶望した、極端に言えば、「遺書」ともいえるような内容である。彼はいったん死に、そして「復活」した。その原動力は何か。それは、当然のことながら、彼が『徒然草』の執筆を中断していた間に経験したことである。その、彼の人生観を逆転させるほどの経験とは、何か。それは、書物から、としか考えられない。なぞを解く鍵は、④⑪「今の内裏」（三三三）から④⑫「疎き人の」（三七段）までの五段にわたる段（これを仮に

「復活」への「つなぎの段」と名づけておく）を経て記される、三八段である。

「名利に使はれて、しづかなるいとまなく、一生を苦しむるこそ愚かなれ。」で始まる段は、実に力強い。細かい検討はまた別の機会に述べたいと思うが、再び極端に言えば、三〇段までの自分の考えをすべて否定しているかとも思われる表現が次々と噴出しているのである。最後は「迷ひの心をもちて名利の要を求むるに、かくのごとし。万事は皆非なり。言ふにたらず、願ふにたらず。」とまとめ、冒頭と照応し、一貫性をもっている。力強さがある。

その中で、注目したいのは、中国思想の影響が強く見出されるということである。就中、「智恵出でては偽あり」（老子）「可・不可は一条なり」（莊子）といった老莊思想の影響に注目したい。思いおこされるのは②〇「ひとり灯のもとに文をひろげて」（二三段）である。兼好は、「いにしへの中国」のあり方を第一としていた。「文」によって自分が「なぐさむ」という状態になるとも言っている。「文」について「文選」「白氏文集」「老子」「南華の篇」の順にあげている。素直に受け取れば、一三段を記述した時点では、その順番に興味をもち、その順番に読んだということになる。「老子」はその時点では三番めであった。彼の興味の対象は「文選」「白氏文集」という、平安時代からの基本的な教養書ともいうようなものにすぎなかったというわけである。しかし、三〇段という心の苦難を乗り越えるにはその二作品では、不足すぎたのである。

推定すれば、彼は絶望の時期に、毎日毎日「老莊思想」にあたる書物

をむさぼるように読み続けたに違いない。無為自然をとく思想には、まさに目から鱗がおちる思いであつたろう。「老莊思想」が兼好を絶望の淵から「復活」させた、それが『徒然草』を再執筆させ、本格的な随筆へと導いたのである。